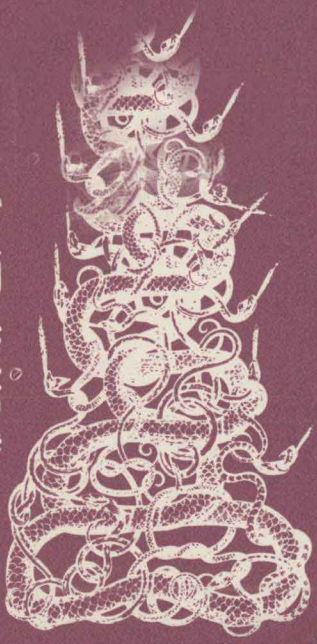
Contes Fantastiques Français du 19e Siècle:
Jean Lorrain et d'autres.

田順一郎　荒俣宏　責任編集



フランス幻想短篇集

J.ロラン…他

Français du 19e Siècle: Jean Lorrain et d'autres.

川口顕弘　編・訳

国書刊行会

世界幻想文学大系……責任編集＝紀田順一郎＋荒俣宏
第三十三巻

十九世紀フランス幻想短篇集
昭和五八年一二月二〇日印刷　昭和五八年一二月二五日初版第一刷発行
著者――J・ロラン他
編・訳者――川口顕弘
発行者――佐藤今朝夫
発行所――株式会社国書刊行会
東京都豊島区巣鴨三―五―一八　郵便番号一七〇　電話〇三―九一七―八二八七　振替東京五―六五二〇九
造本者――杉浦康平＋鈴木一誌　協力＝佐藤篤司
挿画――渡辺富士雄
印刷所――凸版印刷株式会社＋セイユウ写真印刷株式会社
製本所――凸版印刷株式会社
定価――三、〇〇〇円
●―落丁本・乱丁本はおとりかえします

川口顕弘かわぐちけんこう
一九三四年、旧満州生れ。
早稲田大学第一政治経済学部卒業後、
同文学部大学院博士課程終了。
現在、千葉商科大学教授。
専攻、フランス文学。
主要訳書――
ゴーチエ『魔女伝説』森開社、一九七九年。
ボレル『シャンパヴェール悖徳物語』
国書刊行会、一九八〇年。
ボレル『狂想賦』国書刊行会、一九八一年。
オネディ『火と炎』而立書房、一九八三年。

世界幻想文学大系——第三十三巻

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

十九世紀フランス幻想短篇集

J・ロラン他——川口顕弘＝編訳

目次

7 ―― 十九世紀フランス幻想短篇集

9 ―― 謎のスケッチ――エルクマン=シャトリヤン
37 ―― 古代の指輪――サミュエル=H・ベルトゥー
49 ―― 死の刻限――アベル・ユゴー
57 ―― 胸騒ぎ――ペトリュス・ボレル
81 ―― 幽霊――アロイジュス・ブロック
105 ―― 高名な魔術使――アルチュール・ゴビノー
159 ―― トビアス・グヴァルネリウス――シャルル・ラブー
189 ―― コモール伯――エミール・スーヴェストル
201 ―― 眼蓋のない眼――フィラレート・シャール

227——白い廿日鼠——エジェジップ・モロー
249——マンドラゴラ——ジャン・ロラン
271——贋の鳥——カチュール・マンデス
277——死者たちの対話——フランソワ・コペ
287——夢——グザヴィエ・フォルヌレ
311——未来の新聞——シャルル・クロ
321——恋に狂って死んだ小石——シャルル・クロ
325——クシペユ——J－H・ロニ兄（エネ）
367——あとがき……川口顕弘

十九世紀フランス幻想短篇集

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

謎のスケッチ……エルクマン＝シャトリヤン

ERCKMANN-CHATRIAN

Emile ERCKMANN（1822–99）と Alexandre CHATRIAN（1826–90）の苗字を合せたペンネーム。共にアルザス・ロレーヌ出身で、この地方を背景に数多くの「国民小説」を合作した。但し、実際の執筆はエルクマンが担当、シャトリヤンの方は助言や原稿の手直し、出版社との交渉などが主であったらしい。デビュー作『幻想物語集』（1849）ほか、初期の幻想作品群はどれも不評だったが、写実主義に転じた『名医マテウス』（1859）以後、主に大革命と帝政の時代を題材とする大部分の作品は、語り口の面白さと平明な文体、豊かな地方色と愛国的熱情に依って、一時は大デュマにも比肩する絶大な人気を博した。

1

ニュールンベルグの聖セバルト礼拝堂の正面、トラバンス通りの角に、間口が狭く、屋根の高い、小さな旅籠屋が立っている。切妻屋根は鋸状に段をなし、窓ガラスは埃だらけで、屋根の上には漆喰の聖母像が載っている。私はこの旅籠屋で、わが人生の最も憂鬱な日々を過したのだった。ニュールンベルグに行ったのは昔のドイツの巨匠たちを研究するためだったが、何しろ手持ちの金がなかったから、肖像画を描いて暮さねばならなかった。……だが、それはまた何たる肖像画だったことだろう！　膝の上に猫を抱いた太っちょのおかみさんだの、かつらをかぶった小役人だの、三角帽もいかめしいお偉方の肖像ばかり、どれもこれも絵具皿一杯の黄土色と朱色で引き立てた、埒もない肖像画ばかりだった。

しかも私は、そんな肖像画から更にスケッチ画へ、スケッチ画から更にシルエット画へと転落して行ったのだ。

絶えず自分の背中に宿の主人の存在を感じていねばならぬとは、これほど情ないことがまたとあろうか？

彼は唇をへの字に曲げ、耳障りな声、恥知らずな態度で、毎日こんなことを言いに来るのだ。「え、旦那！近いうちにお支払いは頂戴けるんでしょうな？　お勘定がいったい幾らになってるか、旦那はご存知ですかい？　いやいや、そんなことは気にもとめておられんのだ。……旦那はめしを食っておられる。酒を飲み、安らかに眠っておられる。……小鳥どもにさえ、主はその日の糧を与えておられるってわけだ。旦那のお勘定は二百フローリン十クロイツァーに達してるんですぜ。……そんなことはわざわざ言わんでも解っとるでしょうがな」

こう云う美しいさえずりをお聞きになったことのない人には、それがどういう気分のものか、想像すること

もできないだろう。芸術への愛、豊かな想像力、美神への聖なる熱狂も、この手の阿呆の息吹きを受けては一挙に乾からびてしまうのだ。……物腰はぎごちなく、おどおどし、活力のすべては頓に失われ、個人的な品位に対する感覚もそれと同じになってしまう。果ては遙か遠くから、恭しげに挨拶するに到るのだ。「これはこれは、シュネガンス市長閣下」などと！

或る夜のこと、いつもながら鐚銭一文もなく、しかも旅籠の、かの堂々たるラップ親爺から、豚箱にぶちこんでくれようかと脅されていた私は、遂に一切を投げ棄てて、自分の頸を掻き切ろうと決心した。こんな楽しい考えを抱きつつ、窓の前のぼろ寝台に坐って、私は数知れぬ哲学的思索、そしてまた大なり小なり喜ばしい思索に耽ったのだった。

《人間なんていったい何だ？　たかだか雑食性の一動物に過ぎないじゃないか》と私は考えた。《犬歯に門歯、それに臼歯なんてものを備えている顎を見れば、それが立派に証明されている。犬歯とは肉を喰いちぎるためのものだ。門歯は果実を噛み取るためのものだ。臼歯は味や匂いのよい動物や植物の肉を、噛んだり、砕いたり、磨りつぶすためのものだ。だが噛みつくものが何一つないってことになれば、この動物は大自然の中で最も莫迦げた、真の余計ものになってしまう。四輪馬車にくっつけた五番目の車輪と云ったところなんだ》

私の瞑想はこうした類のものだった。だが剃刀の刃を開いてみる勇気はなかった。論理の持つ打ち勝ち難い力が、手っ取り早くけりをつけようと云う勇気を、遂に私に吹きこむかも知れない。それが怖かったのである。だから私は、この種の理屈をたっぷりと並べた後で、燭台の火を吹き消し、続きは翌日に持ち越すことにしたのだった。

あの忌わしいラップ親爺は、私のことを全くの痴呆にしてしまったのだ。私はもはや事実上、芸術としてはシルエット画だけしか念頭になかったし、唯一の望みと云えば金を握って、あのおぞましい親爺を追っ払うことだけだった。ところがその夜は、私の心に何か異常な変革が生じていたのだ。一時頃、私は眼を覚して再びランプに灯をつけた。そして灰色のぼろ服に身をくるむと、すごい速さで紙の上にオランダ画派風のスケッチを描き始めた。……それは何か得体の知れぬ、奇っ怪な、いつもの私の考えとはまるで何の関係もない、不思議な絵であった。

どうか陰気な中庭を——荒れ果てた高い壁に取り囲まれた中庭を、思い浮べていただきたい。……その壁には地上七尺か八尺のところに鉤が植えつけてある。一眼で肉屋の中庭であることが了解される。左手には荒削りの木で造られた格子の囲いがあり、その格子の間から解体中の牛が一頭、大きな滑車で天井に吊るされているのが見える。床にはべっとりと血潮の海が流れ、やがて一つところに集まって、何かわけの解らぬ残骸で一杯の、小さな溝に注いでいる。

光線は画面の上の、立ち並ぶ煙突の間から射している。そこには掌ほどの大きさの空の一角に風見鶏が浮き上り、近隣の家々の屋根が、層々たるその影をくっきりと積み重ねている。

このうらぶれた中庭の奥には物置小屋が一つある。……小屋の下には薪の山があり、薪の上には梯子だの、藁束などが積み重ねられ、更に鶏籠が一つ、もう使えなくなった兎小屋が一つ、載っている。

いったいこのような雑然たる光景は、どうやって私の想像裡に浮び上ったのだろう?……私には解らない。私はこれに類する如何なる微かな記憶をも持ってはいなかった。けれども鉛筆を走らせる都度、それは紛れもない真実のみが持つ見事な写実的効果を表してきた。この絵には何一つ不足するものはなかった!

だが右手には、絵の一角が空白のまま残っていた。……そこに何を描けばいいのか、私には解っていなかった。……と、その空白部に何かが動き、うごめいた。……突如、一本の足首が——地面から浮き上った、裏返しの足首が——見えて来た。そんな姿勢は到底ありうべくもない筈だったが、にも拘わらず私は、何を描こうとしているのか自分にも解らぬまま、この天与の閃きを追い続けたのだ。足首は更に脛や膝につながり……力一杯、ぴんと突っ張る脚の上に、やがて着物の乱れた裾が見えて来た。……手短かに言えば、それは老婆の姿であった。醜くやつれ、顔をゆがめ、髪振り乱して井戸の縁にのけぞりながら、自分の首を締めつける男の手と懸命に抗がっている一人の老婆の姿なのであった。このような情景が次々に、画面の上に現れたのである。

私が描いていたのは殺人場面だったのだ。鉛筆が私の手からはたりと落ちた。

女はあられもない恰好で井戸の縁石に腰をのけぞらせ、その顔は恐怖にひきつり、双の手は人殺しの腕をがっきと掴んでいる——その姿は私をひどく怯えさせた。……私にはそれを見る勇気もなかった。ところが、腕につながる男の姿は、一向に浮んでは来なかったのだ。……この絵を仕上げることはできなかった。

《疲れてるんだ》と私は、額にびっしり汗をかきながら考えた。《後はただ、こいつの顔を描くだけだ。明日仕上げることにしよう。……後は簡単なものさ》

そして私は、なおも自分で作り上げた幻影に怯えながら再び床に就いたのである。五分後にはぐっすり眠りこんでいた。

翌日、私は夜明けと共に起きて、つい今しがた服を着終えたところだった。未完成の作品に改めて取りかかろうとしていたのだ。その時、コツコツと二度、扉を軽く叩く音がした。

「お入んなさい！」
扉は開いた。敷居の上に、もうかなり老年の、背の高い、痩せた黒服の男が現れた。その男の表情、眼と眼の間が狭いその顔、鷲の嘴のように大きな鼻、その鼻の上の、ごつごつした広い額——これらはどことなく厳しい感じを漂わせていた。彼は重々しく私に会釈した。
「クリスチアン・ヴェニュス画伯でございましょうかな？」
「はい、わたくしですが」
彼は再び頭を下げて付け加えた。
「フレデリック・ファン・シュブレクダール男爵と申します！」
ファン・シュブレクダールは金持の美術愛好家で、刑事裁判所の判事であった。こういう男がこのみすぼらしいぼろ住居に現れたと云うことは、私に強い感銘を与えた。だからつい、虫喰いだらけのがたがたの家具や、じめじめと湿っぽい壁布や、埃だらけの床の上を、こっそり盗み見しないではいられなかった。そんな惨澹たる情景は、私をひどく恥じ入らせたのである。……だが、ファン・シュブレクダールは、そんなものなど気にもとめる様子がなく、私の小さな机の前に腰を下して、
「ヴェニュス画伯」と口を切った。「私が参りましたのは……」
だがその瞬間、彼の眼は未完成のスケッチの上に留まったのである。……彼は話を終いまで続けようとはしなかった。私はぼろ寝台の端に腰かけていたが、この人物が私の作品の一つに向けた突然の関心は、心臓を何とも言いようのない不安で高鳴らせたのだった。
一分後、ファン・シュブレクダールは顔を上げた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.